

「底が突き抜けた」時代の歩き方 435

誰がイエスをキリストにしたのか

映画『パッション』は新約聖書をもとに、イエス・キリストの生涯最後の12時間を描いた作品である。「パッション」という言葉が「受難」を意味するように、逮捕から磔刑にいたるイエスの受難は、夜更けの暗いゲッセマネで一人祈っているイエスが捕らわれる瞬間から始まっていた。監督のメル・ギブソンは当時のイエスの受難がどれほど凄まじく、残忍なものであったか、そして生身を激しく切り刻まれるイエスはその苛酷な刑にどのように耐えたのかを、克明に描写したのである。超保守派のカトリック教徒であるギブソンは四つの福音書を軸に忠実に再現したが、イエスの死後数十年たってから書かれた福音書自体が布教活動をメインにしていたために、福音書の記述そのものが史実を正確に反映しているとはとてもいいがたかった。

しかしながら、おそらくギブソンにとってそんな批判や疑問は意に介さなかった筈だ。なぜなら、史実どおりであろうとなかろうと、イエスは四つの福音書の中にしか存在していなかったから、もし史実をとるか福音書の中のイエスをとるか迫られれば、後者であることは明白だったろうからだ。信仰とはそういうものであった。更に、別の批判もある。「誰がキリストを殺したのか」という問いが、イエスの受難劇ではどうしても避けられなかった。というよりも、避けられないと感じる人が多数存在していたのである。ローマ帝国の総督ピラトがイエスの処刑に対する判断から身を引き、ユダヤ群衆の望みどおりに処すことを委ねた場面に目を据えれば、どうしてもイエスを殺したのはユダヤ群衆であって、決定権を持っていた筈のローマ帝国ではありえなかったからだ。キリスト教徒の中にはユダヤ人流浪の二千年近くにわたって、イエスを死に追いやったユダヤ人として迫害してきた歴史があり、反ユダヤ主義の再燃が懸念されていた。

だがそれにしても、「誰がキリストを殺したのか」という論争は不可解なところがある。正確に言えば、「誰がイエスを殺したのか」という問いでなければならなかったからだ。つまり、イエスは殺されることによってキリストとして崇められたと思われるからだ。いいかえると、イエスが処刑されずに生き長らえていたなら、イエスはキリストとして聖化されることはなかった（かもしれない）だろうからだ。イエスは処刑されて命を絶たれることによって、キリストとして聖化されていったという見方からすれば、「誰がキリストを殺したのか」という問いはやはり、「誰がイエスを殺したのか」という問いでなければ成立しなかった。

イエス＝キリストの立場に立つキリスト教徒からすれば、「誰がキリストを殺したのか」と問うことも、「誰がイエスを殺したのか」と問うことも等価であっただろう。だ

が信者の思い込みの外では、イエスは死後にキリストとして永遠の命を与えられたのであって、生前のイエスは必ずしも多くの人々にキリストとみなされているわけではなかった。それは福音書にもちりばめられている。たとえば、『マタイによる福音書』には、十字架につけられたイエスを人々が嘲笑する情景が次のように描かれている。

彼らはイエスを十字架につけてから、くじを引いて、その着物を分け、そこにすわってイエスの番をしていた。そしてその頭の上の方に、「これはユダヤ人の王イエス」と書いた罪状書きをかけた。同時に、ふたりの強盗がイエスと一緒に、ひとり右に、ひとり左に、十字架につけられた。そこを通りかかった者たちは、頭を振りながら、イエスをののしって言った、「神殿を打ちこわして三日のうちに建てる者よ。もし神の子なら、自分を救え。そして十字架からおりてこい」。祭司長たちも同じように、律法学者、長老たちと一緒にあって、嘲笑して言った、「他人を救ったが、自分自身を救うことができない。あれがイスラエルの王なのだ。いま十字架からおりてみよ。そうしたら信じよう。彼は神にたよっているが、神のおぼしめしがあれば、今、救ってもらうがよい。自分は神の子だと言っていたのだから」。一緒に十字架につけられた強盗どもまでも、同じようにイエスをののしった。（27．35 - 44）

この情景と「誰がキリストを殺したのか」という問いを重ね合わせながら考えると、この問いの奇妙さがやはり浮かび上がってくる。人に神の子キリストがはたして殺せるか、という疑問が湧き起こってくるからだ。人に殺せるのは人（や他の生物）であって、神の子キリストを殺すことはできないだろう。その点からも、たとえキリスト教徒がイエス＝キリストと信じていたとしても、「誰がキリストを殺したのか」という問いは、「誰がイエスを殺したのか」という問いに取って代わられるのが正確である。それにどうしてイエスが神の子キリストであったのかは、使徒や信者以外には誰もわからなかった。その使徒でさえ、一番弟子の「ペテロの否認」にみられるように、イエスが神の子キリストであるのを疑っている始末であった。イエス自身が自分をはたして神の子キリストであると思っていたらうか。

使徒も信者もイエスが神の子キリストであることを疑う中で、イエスが神の子キリストであるなどと誰が信じるだろう。十字架につけられたイエスにむかって、「もし神の子なら、自分を救え、そして十字架からおりてこい」とか、神の子なら神に救ってもらえ、という声が起こるのは当然であった。人々にとって神の子とは、そういう具体的なかたちをとってしかあらわれようのないものであったからだ。人々のそんな願望にむかって、神の子であることを試すようなことを願ってはならない、といえるだろうか。なぜなら、イエス自身布教活動の中で、盲人や聾者を癒したり、悪霊を追い払ったり、死者を復活させるような数々の奇跡を行ってきているからだ。それらの奇跡を行わずして、どうしてイエスに付き従う人々が現れてくるだろう。

イエスが語る言葉にひきこまれるだけでなく、それと同等か、あるいはそれ以上にイエスが施す数々の具体的な奇跡に魅せられてきた者からすれば、十字架につけられたイ

イエスが本当に神の子であるかどうかの証を求めたくなるのはあまりにも道理であった。イエスが本当に神の子であるなら、最大の危機である十字架上でそのことを証明してみせよ、もしこの機会を逃したら、神の子であることを証明する機会は今後もどこにもないだろう、という問いが、人々の胸中に湧き起こっても不思議ではなかった。ここで想起されるのは、修行中の青年イエスが荒野で試みられた悪魔との問答である。

そして、四十日四十夜、断食をし、そののち空腹になられた。すると試みる者がきて言った、「もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらん下さい」。イエスは答えて言われた、「『人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言^{ことば}で生きるものである』と書いてある」。それから悪魔は、イエスを聖なる都に連れて行き、宮の頂上に立たせて言った、「もしあなたが神の子であるなら、下へ飛びおりてごらん下さい」。

『神はあなたのために御使^{みつかい}たちにお命じになると、

あなたの足が石に打ちつけられないように、

彼らはあなたを手でささえるであろう』

と書いてありますから」。イエスは彼に言われた、「『主なるあなたの神を試みてはならない』とまた書いてある」。次に悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華とを見せて言った、「もしあなたが、ひれ伏してわたしを拝むなら、これらのものを皆あなたにあげましょう」。するとイエスは彼に言われた、「サタンよ、退け。『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』と書いてある」。そこで、悪魔はイエスを離れ去り、そして、御使^{みつかい}たちがみもとにきて仕えた。（『マタイによる福音書』4・2-11）

空腹に耐えているイエスにむかって、神の子ならこれらの石をパンに変えてみせよ、とか、神の子なら宮の頂上から飛び下りてみせよ、と誘惑する悪魔の声は、十字架につけられたイエスにむかって、神の子なら十字架からおりてみせよ、と嘲笑する人々の声として甦っているのが感じられる。しかしながら、悪魔の声に対しては「主なるあなたの神を試みてはならない」と一蹴することはできても、イエスが十字架につけられた土壇場でイエスが神の子であるかどうかの証をみたいと望んでいる人々の声まで、はたして「主なるあなたの神を試みてはならない」と一蹴することができるだろうか。つまり、悪魔の声とは異なる人々の声であったとしても、「主なるあなたの神を試み」るようなすべての声は、悪魔の声として退けられなくてはならないのだろうか。

イエスが本当に神の子であるかがわからなかった一般の人々にとって、イエスが神の子であることの証をどのようにして認めればよいのだろうか。イエスを神の子として布教する福音書の作者たちの考えからすれば、その答えははっきりしていた。イエスが十字架からおりてくるといふ、万人に認められるような奇跡を人々はイエスに求めるのではなく、自分自身に奇跡を求めよ、ということであった。福音書の作者たちの答えには一理あった。なるほどイエスが神の子であったなら、十字架からおりてみせるよう

な奇跡はたやすかったであろう。その奇跡によってイエスは万人を帰依させることもできたにちがいない。しかし、奇跡を通じて万人を帰依させることは、そのためにこれからも奇跡が矢継ぎ早に不可欠になることを意味する。要するに、奇跡による万人の支配にほかならない。そうすると、神の子の奇跡による支配はローマ帝国やユダヤ民族主義的権力による支配に取って代わっただけであり、支配 - 被支配の関係に人々が置かれていることに依然変わりはないだろう。

神の子イエスに奇跡を求めて、自らが奇跡の奴隷になってはならないとするなら、奇跡以外のかたちで人々はどのようにして、イエスが神の子であることを認めることができるのか。福音書の作者たちからすれば、イエスが神の子であるかどうかは、ひとえにイエスの言葉や行いを神の子の言葉や行いとして人々が信じるかどうかにかかっていた。福音書の作者たちは、奇跡を行うことによってイエスは神の子として信じられるようになるというありかたを、イエスを神の子として信じることによって奇跡がもたらされるというように引っくり返してみせたのだ。奇跡があって信仰がやってくるのではなく、信仰があって奇跡がやってくるというふうに。したがって、奇跡を求めて信仰をもたない人々には、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ（わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか）」と大声で叫ぶ、絶望に駆られた弱々しい一人の男しか十字架架上に見出すことはできなかった。

イエスの死後、信仰をもった者にのみ奇跡は訪れた。『マタイによる福音書』には、イエスが息を引き取った直後の光景が次のように描写されている。

すると見よ、神殿の幕が上から下まで真二つに裂けた。また地震があり、岩が裂け、また幕が開け、眠っている多くの聖徒たちの死体が生き返った。そしてイエスの復活のち、墓から出てきて、聖なる都にはいり、多くの人に現れた。百卒長、および彼と一緒にイエスの番をしていた人々は、地震や、いろいろのできごとを見て非常に恐れ、「まことに、この人は神の子であった」と言った。また、そこには遠くの方から見ている女たちも多くいた。彼らはイエスに仕えて、ガリラヤから従ってきた人たちであった。その中には、マグダラのマリヤ、ヤコブとヨセフとの母マリヤ、またゼベダイの子たちの母がいた。

夕方になってから、アリマタヤの金持で、ヨセフという名の人 came。彼もまたイエスの弟子であった。この人がピラトの所へ行って、イエスのからだの引取りかたを願った。そこで、ピラトはそれを渡すように命じた。ヨセフは死体を受け取って、きれいな亜麻布に包み、岩を掘って造った彼の新しい墓に納め、そして墓の入口に大きい石をころがしておいて、帰った。マグダラのマリヤとほかのマリヤとが、墓にむかってそこにすわっていた。

あくる日は準備の日の翌日であったが、その日に、祭司長、パリサイ人たちは、ピラトのもとに集まって言った、「長官、あの偽り者がまだ生きていたとき、『三日の後に自分はよみがえる』と言ったのを、思い出しました。ですから、三日目まで墓の番をするように、さしずをして下さい。そうしないと、弟子たちがきて彼を盗み出し、『イエス

は死人の中から、よみがえった』と、民衆に言いふらすかも知れません。そうすると、みんなが前よりも、もっとひどくだまされることになりましょう。ピラトは彼らに言った、「番人がいるから、行ってできる限り、番をさせるがよい」。そこで、彼らは行って石に封印をし、番人を置いて墓の番をさせた。（27 . 51 - 66）

イエスの死の直後に、地震が起こって神殿の幕が真二つに裂けたり、岩が裂けたり、墓が開いて聖徒たちの死体が生き返るという描写をみると、イエスが十字架にはりつけられているときに多くの人々が望んだ奇跡はみられなかったのに、イエスの死の直後に多くの奇跡が惹き起こされるのであれば、多くの人々が奇跡を望んでいるイエスの生前に奇跡を行えばよかったであろうに、と率直な疑問が湧き起こってくるが、しかし、イエスの死の直後に惹き起こされたさまざまな奇跡は、イエスの弟子たちの間に惹き起こされたものであった。弟子以外の多くの人々の目で岩が裂けたり、墓の中から聖なる死者たちが甦ったわけではないことに注意しなくてはならない。

イエスの死の直後に起こった多くの出来事に接したのは、マグダラのマリヤであり、ヤコブとヨセフとの母マリヤであり、ゼベダイの子たちの母であり、イエスに仕えて、ガリラヤから従ってきた人たちであった。すなわち、すべて使徒であり、信徒であった。百卒長、および彼と一緒にイエスの番をしていた人々は、地震や、いろいろのできごとを見て非常に恐れ、「まことに、この人は神の子であった」と言った。という記述は、唯一イエスに付き従ってきた人たち以外の証言にみえるけれども、彼らもイエスが捕らわれて十字架につけられ、処刑されるという一連の流れの中で、イエスに最も身近に接する職務に就くことによって、イエスを神の子として崇めるようになった人たちであった。「まことに、この人は神の子であった」という言葉は、イエスが神の子であると思い始めていた自分たちの気持が、地震等の多くの出来事に遭遇して確信に変わったことをあらわしていた。

墓の中で眠っている多くの聖徒たちの死体が、イエスの復活ののち、墓から出てきて、聖なる都にはいり、多くの人に現れたという場面も、イエスを神の子であるなどと露とも思っていない人々の前に現れたということではなかった。多くの奇跡はイエスを神の子と信じる人々の間にしか起こらなかったのである。祭司長やパリサイ人たちがピラトの許に集まって、イエスが生前に「三日の後に自分はよみがえる」といっていたのを、弟子たちが墓からイエスを盗み出して、「イエスは死人の中から、よみがえった」と民衆にいいふらすおそれがあるから、三日目まで墓の番をする必要性を求めたという記述は、信徒たちにはあらわれたさまざまな奇跡が、信徒以外の者たちには全く訪れなかったことをあらわしていたのだ。つまり、奇跡は信徒たちの間の出来事でしかなかった。『マタイによる福音書』は続いて、「イエスの復活」についてこう描写している。

さて、安息日が終って、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリヤとほかのマリヤとが、墓を見にきた。すると、大きな地震が起った。それは主の使が天から下って、そこにきて石をわきへころがし、その上にすわったからである。その姿はいなずまのよう

に輝き、その衣は雪のように真白であった。見張りをしていた人たちは、恐ろしさの余り震えあがって、死人のようになった。この御使は女たちにむかって言った、「恐れることはない。あなたがたが十字架におかかりになったイエスを捜していることは、わたしにわかっているが、もうここにはおられない。かねて言われたとおりに、よみがえられたのである。さあ、イエスが納められていた場所をごらんなさい。そして、急いで行って、弟子たちにこう伝えなさい、『イエスは死人の中からよみがえられた。見よ、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。そこでお会いできるであろう』。あなたがたに、これだけ言うておく」。そこで女たちは恐れながらも大喜びで、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。すると、イエスは彼らに出会って、「平安あれ」と言われたので、彼らは近寄りイエスのみ足をいだいて拝した。そのとき、イエスは彼らに言われた、「恐れることはない。行って兄弟たちに、ガリラヤに行け、そこでわたしに会えるであろう、と告げなさい」。

女たちが行っている間に、番人のうちのある人々が都に帰って、いっさいの出来事を祭司長たちに話した。祭司長たちは長老たちと集まって協議をこらし、兵卒たちにたくさんのお金を与えて言った、「『弟子たちが夜中にきて、われわれの寝ている間に彼を盗んだ』と言え。万一このことが総督の耳にはいっても、われわれが総督に説いて、あなたがたに迷惑が掛からないようにしよう」。そこで、彼らは金を受け取って、教えられたとおりにした。そしてこの話は、今日に至るまでユダヤ人の間にひろまっている。

さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行って、イエスが彼らに行くように命じられた山に登った。そして、イエスに会って拝した。しかし、疑う者もいた。イエスは彼らに近づいてきて言われた、「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテマス^{みづかみ}を施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」。 (28. 1 - 20)

四つの福音書の中で、より多くの信者を獲得するためのメッセージに溢れているのが『マタイによる福音書』であり、したがって、党派性が最大に発揮されている。「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」と説く一方で、偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわざである。あなたがたは白く塗った墓に似ている。外側は美しく見えるが、内側は死人の骨や、あらゆる不潔なものでいっぱいである。このようにあなたがたも、外側は人に正しく見えるが、内側は偽善と不法とでいっぱいである。／偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわざである。あなたがたは預言者の墓を建て、義人の碑を飾り立てて、こう言っている、『もしわたしたちが先祖の時代に生きていたなら、預言者の血を流すことに加わってはいなかっただろう』と。このようにして、あなたがたは預言者を殺した者の子孫であることを、自分で証明している。あなたがたもまた先祖たちがした悪の^{ますめ}枳目を満たすがよい。へびよ、まむし

の子らよ、どうして地獄の刑罰をのがれることができようか（23・27-33）という悪罵と呪詛が、そこには満ち満ちていた。

その党派性は他の三つの福音書には記述されていない場面のなかで、露骨に貫かれている。その場面は、イエスの遺体が墓から消えていたことを、祭司長たちと長老たちが協議して、「弟子たちが夜中にきて、われわれの寝ている間に彼を盗んだ」といいふらすように、兵卒たちにたくさんの金を与えたという個所である。そしてこの話は、今日に至るまでユダヤ人の間にひろまっていると、ユダヤ教徒に対する憎悪を募らせている。同じイスラエル民族でありながら、イエスを旧約聖書で預言されている「メシア（救い主）」のキリストとして信じていった自分たちをキリスト教徒として分かち、まだメシアは出現していないとメシアを待ち望んでいるユダヤ教徒との確執がそこにみられるのである。その場面だけでなく、弟子たちがイエスの遺体を盗み出して、「イエスは死人の中から、よみがえった」と民衆に言いふらすかもしれないから、三日目まで墓の番をするように指図をする場面も他の福音書にはみられず、「イエスの復活」をより強調するために創作したと考えられる。

最も古く、党派性もそれほど強くはない『マルコによる福音書』では、「イエスの復活」についての記述はこうなっている。

〔週の初めの日の朝早く、イエスはよみがえって、まずマグダラのマリヤに御自身をあらわされた。イエスは以前に、この女から七つの悪霊を追い出されたことがある。マリヤは、イエスと一緒にいた人々が泣き悲しんでいる所に行き、それを知らせた。彼らは、イエスが生きておられる事と、彼女に御自身をあらわされた事とを聞いたが、信じなかった。〕

この後、そのうちのふたりが、いなかの方へ歩いていると、イエスはちがった姿で御自身をあらわされた。このふたりも、ほかの人々の所に行き話したが、彼らはその話を信じなかった。

その後、イエスは十一弟子が食卓についているところに現れ、彼らの不信仰と、心のかたくななことをお責めになった。彼らは、よみがえられたイエスを見た人々の言うことを、信じなかったからである。そして彼らに言われた、「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を^の宣べ伝えよ。信じてバプテスマを受ける者は救われる。しかし、不信仰の者は罪に定められる。信じる者には、このようなしるしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を追い出し、新しい言葉を語り、へびをつかむであろう。また、毒を飲んでも、決して害を受けない。病人に手をかけば、いやされる」。

主イエスは彼らに語り終ってから、天にあげられ、神の右に^のすわられた。弟子たちは出て行って、至る所で福音を宣べ伝えた。主も彼らと共に働き、御言に^{みことば}に伴うしるしをもって、その確かなことをお示しになった。〕（16・9-20）

この記述はなぜか〔 〕の記号で括られて、註記のような印象を読む者に与えるが、『マタイによる福音書』では曖昧にされていた「イエスの復活」が弟子たちの信仰の間

題にほかならないことが、『マルコによる福音書』では明確にされている。イエスはよみがえって、まずマグダラのマリヤに御自身をあらわされた ということは、次のように解釈する必要があると思われる。おそらく「イエスの復活」はマグダラのマリヤのみならず、十一弟子を含むイエスのかかわったすべての人々に同時に訪れたにちがいない。ところが、ほとんどの人々が「イエスの復活」に気づかなかったが、マグダラのマリヤだけがそのことに気づいた。なぜ彼女が真っ先に気づいたかといえ、彼女は「イエスの復活」について全く疑っていなかったからである。このことは、「イエスの復活」が信じられていないところでは、イエスは復活できなかったことを示している筈だ。

だから、マグダラのマリヤが「イエスの復活」について知らせたとしても、「イエスの復活」を疑っている人々の間では相手にされなかった。おそらく「イエスの復活」は危機に瀕していた筈だ。しかし、「イエスの復活」が弟子たちの不信仰によってその途を閉ざされているという問題は、弟子たちにとってはイエスと共に広めてきたこれまでの布教活動が途絶えるという事態にほかならなかった。イエスの死によって彼らの布教活動は最大のピンチに陥っていたのだ。つまり、「イエスの復活」とは弟子たちの（布教活動の）復活にほかならなかったといえる。復活したイエスが 彼らの不信仰と、心のかたくななことをお責めになった ということはしたがって、イエスがいなくなるやいなや、イエスがいたときと同じように布教活動をしなくなった自分たちを彼らが反省するようになったことを意味する筈だ。弟子たちがイエスの死を乗り越えて再び布教活動に専念するようになったとき、イエスは復活することができたのである。

弟子たちは出て行って、至る所で福音を宣べ伝えた。主も彼らと共に働き、御言に伴うしるしをもって、その確かなことをお示しになった ということは、布教活動が続ける弟子たちの心の中にイエスが復活し、「イエスの復活」と彼らの復活とが重なり合ったのだ。『ヨハネによる福音書』では、「イエスの復活を信じること」がもっと強調されている。マグダラのマリヤが「イエスの復活」について弟子たちに話し、報告した その日、すなわち、一週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人をおそれて、自分たちのおる所の戸をみなしめていると、イエスはいってきて、彼らの中に立ち、「安かれ」と言われた。そう言って、手とわきとを、彼らにお見せになった。弟子たちは主を見て喜んだ。（20：19-20）ところが、そこにいなかった弟子のトマスが、「わたしは、その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ、決して信じない」といった。

八日ののち、イエスの弟子たちはまた家の内におり、トマスも一緒にいた。戸はみな閉ざされていたが、イエスはいってこられ、中に立って「安かれ」と言われた。それからトマスに言われた、「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい」。トマスはイエスに答えて言った、「わが主よ、わが神よ」。イエスは彼に言われた、「あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである」。

イエスは、この書に書かれていないしるしを、ほかにも多く、弟子たちの前で行われた。しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである。

(20・26-31)

イエスの死後、弟子たちが布教活動を中断していたのは、単にイエスの死を悲しんでいたからでも、落胆していたからでもなかった。弟子たちはユダヤ人をおそれて、自分たちのおる所の戸をみなしめている という記述に注意を向けると、なによりも彼らは十字架上のイエスの凄惨な死におののいていたことがわかる。イエスの凄惨な死はもちろん、彼一人のものではなかった。イエスの死は彼に付き従ってきた弟子たちすべての頭上に降りかかっている運命であった。イエスの死後、弟子たちの誰もが、イエスが味わった凄惨な死を自らが被ることになったとしても、イエスの布教活動を続けることができるか、と自問していたにちがいがなかった。一度は生前のイエスを裏切った傷を深くかかえこんでいる弟子たちであった。イエスの死後、もう一度彼を裏切るのかという内心の声と、イエスが被った凄惨な死を我と我が身に引き受けて布教活動に再び従事することができるかという自問とが、弟子たちの一人一人の中で峻烈な火花を散らし合って、重たく申し掛かっていた。

弟子たちが深く逡巡していたのが推測される。イエスを再び裏切りたくないという気持と、イエスの凄惨な死を自分たちも免れえなくなっていくという恐怖心とが激しくせめぎ合う中から立ち上ってくる問いは、おそらく一つであった。それは、それほどの苦難を背負ってまで布教活動を続けることにどのような意味があるのか、ということであった。生前のイエスが何度も心の中で繰り返し広げていたにちがいない自問が、イエスがいなくなって初めて弟子たちの一人一人に襲いかかってきたのだ。弟子たちはユダヤ人をおそれて、自分たちのおる所の戸をみなしめていると、イエスがいってきて、彼らの中に立ち、「安かれ」と言われた という記述は、布教活動に対する凄まじい弾圧とこれまでの布教活動に対する自問とで激しく揺れている弟子たちの心の中に、イエスがいってきて、彼らの中に立ち、「安かれ」と言われた ということであった。

後に必ず自分たちにも見舞ってくるであろう凄惨な死を引き受けるに値するほどの「なにか」が、これまで(これから)の布教活動に内在しているかと問うことは、十字架上で息絶えたイエスの凄惨な死にどのような意味があったのかと問うことであった。いうまでもなくイエスを「神の子」ではなく「人の子」としてみなすなら、十字架上のイエスの死には惨めさしか見出せなかったかもしれない。当然のことながら、福音書の作者たちが弟子たちの苦悩を神の子イエスを否定する方向に立たせる筈がなかった。弟子たちの苦悩はイエスを神の子として信じることの弱さであり、自分たちの布教活動が自分たちを神の国へと導くことに対する懷疑のあらわれにほかならなかった。イエスがトマスに「信じない者にならないで、信じる者になりなさい」とか、「見ないで信ずる者は、さいわいである」といったのは、見ることによって信仰が生まれるのではなく、信仰に

よって見えるようになることを転倒して説いていたのだ。

福音書の作者たちは十字架上で凄惨な死に見舞われたイエスが神の国に入ってしまったことを記述することによって、弟子たちも迫害と弾圧を恐れずにイエスに続くなら、神の国で復活することを示唆していたのである。つまり、露骨ないいかたをすれば、イエスの教えから離れるなら、地上の迫害と弾圧を免れる代わりに神の国は約束されないことと、イエスの教えを受け入れることによって地上の迫害と弾圧を招き寄せることになるかもしれないが、神の国は約束されていることのどちらを選択するかという、二者択一の問題であった。地上での一時的な命に執着するか、それとも永遠の命を得るかということであり、「信じる者は救われる」とはそういうことであった。あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためであるとは、そういうことをあらわしていたと思われる。

なんの保証もないところで弟子たちは逡巡していたのではなく、イエスの教えを受け継いでいくな神の国が約束されているというのは本当なのかどうかというところで、彼らは逡巡していたようにみえる。もちろん、本当に神の国が存在しているかどうかはわからない。死後に神の国が開かれているといわれても、死んでからのことは誰にもわからない。すべては信じるか、信じないかであった。弟子たちは神の国が存在することを信じたのである。死後に神の国が訪れてくるかどうかなどわかる筈もなく、多くの真理を含むイエスの教えに従って生きていくことが正しい人間の途であると思ったが故に、迫害や弾圧に抗して突き進むということではなかったようにみえる。弟子たちの篤い信仰心の裏には、神の国の存在が抜き去りがたく張り付いているのが感じられる。功利的、取引きといった言葉がどうしても浮かんでくる。

イエスの教えがどんなに正しくとも、イエスの死後が神の国とは無縁であったなら、弟子たちはイエスの教えを引き継がなかったのではないかと疑いたくなるほど、弟子たちに神の国の存在が大きく申し掛かっていたのである。しかし、「信じる者は救われる」ということでいえば、救われなくても信じるということが大事ではなかったか。「信じる者は救われる」といったとき、救われるために信じるという転倒が起こってくるのは必然であった。四つの福音書の中にあらわれるイエスの言葉と行動からおぼろげに浮かび上がってくる私のイエス像は、「信じる者は救われる」なんて見え透いたことは一度もいわなかった。救われるかどうかなんてわからないが、自分のいうことを信じよ、であった。救われることを信じることの担保に置いたりしなかった。信じるという行為は無償であらねばならなかった筈だ。ところが、福音書の作者たちはイエスの死後、明らかに「信じる者は救われる」を基軸にして布教活動に勤しんだのである。

いうまでもなく「信じる者は救われる」は裏返せば、「信じない者は救われない」であって、「信じる者」と「信じない者」との間に明確な線引きを行い、「信じる者」に対する迫害と弾圧が激しくなればなるほど、「信じない者」に対する「信じる者」の憎悪と怨念も一層募らされていった。そう、党派性が剥き出しにされていったのだ。「信じ

る者は救われる」というスローガンは、信じても救われるかどうかなんて自分は知らない、という生前のイエスが明らかに含んでいた余地を埋め尽くし、信じることを神の国へのパスポートの条件にしてしまったのだ。『ヨハネによる福音書』にはイエスの死後、ペテロが弟子たちの中心になって人々を導くことが示唆される場面が書き留められている。

彼らが食事をすませると、イエスはシモン・ペテロに言われた、「ヨハネの子シモンよ、あなたはこの人たちが愛する以上に、わたしを愛するか」。ペテロは言った、「主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたがご存じです」。イエスは彼に「わたしの小羊を養いなさい」と言われた。またもう一度彼に言われた、「ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか」。彼はイエスに言った、「主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたがご存じです」。イエスは彼に言われた、「わたしの羊を飼いなさい」。イエスは三度目に言われた、「ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか」。ペテロは「わたしを愛するか」とイエスが三度も言われたので、心をいためてイエスに言った、「主よ、あなたはすべてをご存じです。わたしがあなたを愛していることは、おわかりになっています」。イエスは彼に言われた、「わたしの羊を養いなさい。よくよくあなたに言うておく。あなたが若かった時には、自分で帯をしめて、思いのままに歩きまわっていた。しかし年をとってからは、自分の手をのばすことになる。そして、ほかの人があなたに帯を結びつけ、行きたくない所へ連れて行くであろう」。これは、ペテロがどんな死に方で、神の栄光をあらわすかを示すために、お話しになったのである。

(21・15-19)

この記述からペテロが生前のイエスを三度も否認する場面を想起するというよりも、「ペテロの否認」の場面と意識的に対応させるように記述されているのがわかる。三度の否認によってイエスの磔刑に加担したペテロの屈辱は、イエスの死後の布教活動の中心に位置することによって晴らす以外にない、というペテロの心中を描きつつ、そのことがペテロをイエスと同じ凄惨な死へと誘い、イエスと同じ 神の栄光をあらわす 途へと突き進むことであるということも強調している。「ほかの人があなたに帯を結びつけ、行きたくない所へ連れて行く」ことは、ペテロの凄惨な死を通じて 神の栄光をあらわす 途に入ることであった。ここに、イエスの凄惨な死が必ずしも 神の栄光をあらわす ためのものではなかったにもかかわらず、 神の栄光をあらわす ためにこそ、弟子たちはイエスと同じ凄惨な死に見舞われなくてはならないという倒錯した心情が生みだされているのが認められる。イエスの生涯が 神の栄光をあらわす ための一生でなかったにもかかわらず、弟子たちは激しい迫害と弾圧に耐えるために、イエスの生涯に 神の栄光 を覆い被せることによって、 神の栄光 へと近づくための苦難の道のりとして、イエスの生涯を聖化していったといえる。

2004年8月15日記

